

第三部第三三章～三六章と大谷氏

——大谷禎之介氏の「マルクスの利子生み資本論4」を検証する——

このページは、『資本論』第三部第三三章～三六章に関わる大谷氏のマルクスの草稿の翻訳と『資本論』とを科学的社会主義の観点から点検し、大谷禎之介氏の「マルクスの利子生み資本論4」での大谷氏の主張について検証するものです。

1、「第11章『信用制度下の流通手段』および『通貨原理と銀行立法』（エンゲルス版第3章および第34章）に使われたマルクスの草稿について」での大谷氏の主張の検証

①大谷氏は「はじめに」で、第33章に付けたエンゲルスの表題「Das Umlaufsmittel unter dem Creditsystem」に関して、「学者」らしく、自らの研究にもとづき、第3部草稿においてマルクスは「Creditsystem」という言葉で「信用に係る全てのシステム」について言う場合が多く「Creditwesen」という言葉で「銀行の信用制度」について言う場合が多ことをもとに、「エンゲルスにはマルクスにおけるこの両者のニュアンスの相違をつかむことができなかつたようで、草稿におけるこの両語をエンゲルスはしばしば——恣意的としか言いようのない仕方——取り替えたために、エンゲルス版ではマルクスでの両語のかなり一貫した使い方がすっかり見えなくなってしまう」（P13）とエンゲルスの編集の不備を非難しています。

しかし、とりあえず第33章に付けた表題に限って言えば、大谷氏は「エンゲルスにはマルクスにおけるこの両者のニュアンスの相違をつかむことができなかつた」と言って非難しますが、「ニュアンスの相違」なるものについてはよく分かりませんが（——そして、大谷氏には、マルクスは「Creditsystem」という言葉をこれこれの場合は「信用に係る全てのシステム」の意味で使い、これこれの場合は「銀行の信用制度」の意味で使い、「Creditwesen」という言葉はこれこれの場合は「信用に係る全てのシステム」の意味で使い、これこれの場合は「銀行の信用制度」の意味で使という理由と両者のニュアンスの相違を理解されているのであれば、出し惜しみせず、是非、ご教示願いたいところですが——）、エンゲルスは表題で、「Creditsystem」という言葉を「銀行の信用制度」を表わすものとして使っています。だからこそ大谷氏も『資本論』第33章の表題を「信用制度下の流通手段」と訳し、1968年発行の大月版『資本論』も「第三三章 信用制度のもとでの流通手段」としており、私たちが『資本論』を通じてマルクスの考えを理解するうえで、何の問題もありません。

なお、不破さんは、マルクスが「第三部」を資本主義的生産の「総過程の諸姿容」といっているのにエンゲルスが「資本主義的生産の総過程」と変えてしまったのは、「第三部全体の趣旨を誤解させることで、残念な訂正だったと思います」と、エンゲルスの編集した表現がマルクスの草稿段階の表現と一寸でも違ふと「全体の趣旨を誤解させることで、残念な訂正」とまで言います。

しかし、このように、「表題」が少しでも異なると、内容を理解できなくなり、「全体の趣旨を誤解」してしまうのは、不破さんくらいなものでしょう。

※ただし、エンゲルスが「第三部」を「資本主義的生産の総過程」と表現したのは適切な

ものでした。詳しくは、[ホームページ 4-26-2-3](#)「エセ「マルクス主義」者の『資本論』解説(その3)『資本論』第三部を読む」を検証する。(1/3)の PDF ファイルの 16 ページを参照して下さい。

なお、大谷氏等が、「Creditsystem」という言葉で「信用に係る全てのシステム」についていい、「Creditwesen」という言葉で「銀行の信用制度」についていうと「言葉の定義、をするのであれば、今後その著書の冒頭でそのような趣旨を述べておけば分かりやすと思いますが、あらゆる言葉の定義をしていたら、言葉の定義だけでぶ厚い書物になってしまうことでしょう。

②大谷氏は、「『混乱』というタイトルの意味」についてという「章」を立てて、エンゲルスが「混乱」という表題の文章をどのように見ていたのかということについて、エンゲルスの第三部の序文の「混乱」に関わる部分の一部を取り出し、文章の前後を逆にして、「エンゲルスは、さきに見たように(序文での「混乱」に関わる部分を抜粋引用したこと——青山)、ここで『貨幣市場ではなにが貨幣でなにが資本であるかということについてのここで明るみに出てくる「混乱」をマルクスは批判的に風刺的に取り扱おうとした』と書いて、このタイトルが、『実業家や経済著述家』たちの『貨幣と資本との関係について当時行なわれていたほとんどすべての見解』に見られる『混乱』を指すものであることを示唆している。」(P19)と「解説」します。

そして、大谷氏は、「混乱」という表題の文章についてのエンゲルスの見方を上記のように「特徴づけ」したうえで、「エンゲルスの特徴づけは誤りとは言えないが、」マルクスは貨幣の諸形態の変化を「念頭に置いて『混乱』と言っていたのである。」とエンゲルスの足りない点(?!)を批判(?!)するとともに、「マルクスが抜粋するいっさいの問題関心が、もっぱらそのような概念上、用語上の混乱を衝くところにあったと考えることはできない。」と言って、自ら立てた「『混乱』というタイトルの意味」を考えることの意味を否定し、「むしろ、マルクスはさまざまな観点から興味を覚えた証言(および質問)をアトランダムに書き抜いているように思われる」ので、「『混乱』という表題にとらわれることなく、」証言(および質問)の内容とそれへのマルクスのコメントに即して「混乱」という表題の文章をみることを推奨します。

大谷氏は、エンゲルスが「混乱」という表題の文章は「貨幣市場ではなにが貨幣でなにが資本であるかということについてのここで明るみに出てくる「混乱」をマルクスは批判的に風刺的に取り扱おうとした」というと、それでは「混乱」の捉え方が不十分だと言ったかと思うと、そもそも「『混乱』という表題にとらわれることなく」(「混乱」とは無関係に)「マルクスのコメント」を見ろと言うのです。

まず、「混乱」という表題の文章についてのエンゲルスの序文での捉え方についての大谷氏の「評価」についてですが、大谷氏は、エンゲルスは序文で「貨幣市場ではなにが貨幣でなにが資本であるかということについてのここで明るみに出てくる『混乱』をマルクスは批判的に風刺的に取り扱おうとした」と書いて、「混乱」というタイトルが、『実業家や経済著述家』たちの『貨幣と資本との関係について当時行なわれていたほとんどすべての見解』に見られる『混乱』を指すもの」であることを「示唆している」と述べています。つまり、大谷氏は、「混乱」というタイトルは当時の「実業家や経済著述家」たち

の「貨幣と資本との関係について当時行なわれていたほとんどすべての見解」に見られる「混乱」を指すものとエンゲルスは見ていたと言うのです。

しかし、序文をご覧いただければわかるように、エンゲルスは、「貨幣と資本との関係について当時行なわれていたほとんどすべての見解」がここに出てくる「実業家や経済著述家」たちの陳述によって「代表されている」ことを述べたうえで、これを踏まえて、「貨幣市場ではなにが貨幣でなにが資本であるかということについてのここで明るみに出てくる『混乱』をマルクスは批判的に風刺的に取り扱おうとした」のです。

「混乱」というタイトルは、『『実業家や経済著述家』たちの『貨幣と資本との関係について当時行なわれていたほとんどすべての見解』に見られる『混乱』を指すもの』であることを「示唆している」のではなく、『『実業家や経済著述家』たちの『貨幣と資本との関係について当時行なわれていたほとんどすべての見解』に見られる『混乱』を踏まえて、「混乱」というタイトルで「貨幣市場ではなにが貨幣でなにが資本であるかということについてのここで明るみに出てくる『混乱』をマルクスは批判的に風刺的に取り扱おうとした」とエンゲルスは言っているのです。

エンゲルスが、貨幣の諸形態の変化を念頭に置いて「混乱」と言っていることは言わずもがなで、「第二章」で論及されている、貨幣の持つ流通手段、価値表現、資本の循環形態の一局面である貨幣資本、利子生み資本としての貨幣資本という機能の無理解から、トウクやウイソンが通貨と資本との区別と流通手段がそのときどきにもつ機能の区別の混乱に陥っていること等を前提に序文を書いていることは明らかです。

なお、大谷氏は、ここで、「混乱」の読み方について、『『混乱』という表題にとらわれることなく、「マルクスのコメント」を見るように、「この点については、後出の4であらためて取り上げよう。」と言っていますが、「4」では、「きわめて重要と思われるマルクスのコメントが見られる。しかし、ここでそれらについて立ち入ることは控え、読者の研究に委ねることにしたい。」(P46)とのこと。

大谷氏は、自ら立てた「『混乱』というタイトルの意味」という「章」で何を言いたいのか、私には、さっぱり分かりません。

③大谷氏は、「混乱」の焦点が、「現実資本の運動が〈為替相場および地金の輸出入〉の変動を媒介してMonied capitalの運動をどのように規定するか、という問題である。」と言い、「こうした問題意識を一言で『地金と為替相場』と要約するとすれば、これはまさにエンゲルス版第 35 章の表題そのもの(「貴金属と為替相場」)である。」と述べ、「じつは、マルクスはこの部分(エンゲルス版第 35 章の冒頭——青山)に、『混乱』の最初のページである351a)ページ(エンゲルス版第 33 章——青山)で抜粋された証言第1720, 1747, 1749, 1797, 1802, 1804, 1868, 1889号を利用しているのである。このことも、『混乱』でのマルクスの問題意識の大きな一つが『地金と為替相場』にあったことを示しているといえるであろう。」(P44)と——「問題意識」が「問題意識の大きな一つ」に格下げされていますが——言っています。

『資本論』をぜひお読みいただきたいのですが、エンゲルスは「混乱」と書かれた草稿を使って、「第三三章」と「第三四章」を編集し、その内容は極々々大雑把にいうと、次のようになります。

「第三三章 信用制度のもとでの流通手段」は、商品価格と利子とのあいだにはなにも必然的な関連はないこと、通貨の絶対量は諸商品の価格と諸取引の量と信用の状態によって規定されているが、一般に流通貨幣量と利子率とは関わりがないことを述べ、通貨の絶対量が利子率に規定的に作用するのは、ただ通貨の逼迫期だけのことであり、恐慌のときには信用主義から重金主義への急展開が起きることが述べられ、国立銀行とそれを取り巻く大きな貨幣貸付業者や高利貸しを中心とする信用制度は、産業資本家を周期的に滅殺するだけでなく、危険きわまる仕方現実の生産に干渉する法外な力を発揮することを指摘します。

そして、これらを踏まえ、「第三四章 通貨主義と一八四四年のイギリスの銀行立法」は、「恐慌」と「貨幣」に対する誤った見方、そして、それに伴う誤った「銀行立法」とその「銀行立法」の結果として、誰が利益を上げたかが述べられます。「エンゲルスの加筆部分」がたいへん多い章ですが、エンゲルスの加筆によって、立派に、一つのまとまった「章」に仕上げられました。大谷氏も、「第三四章」の編集については、「ただただ見事」と「評価」するほどです。

このように、「第三三章」、「第三四章」を通じて、貨幣の持つ流通手段、価値表現、資本の循環形態の一局面である貨幣資本、利子生み資本としての貨幣資本という、多面的な機能を念頭において、流通手段としての貨幣が当時の資本主義的生産様式のなかでどのような役割を演じてきたのかを考察し、これらを踏まえ、「第三五章 貴金属と為替相場」は、産業循環の中での、貴金属の輸出入と為替相場と利子率及び商品価格をトータルに扱っています。

だから、「第三五章」が「第三三章」を踏まえるのは、至極当然なことですが、だからといって、「第三三章」と「第三四章」が「第三五章」のための準備の「章」のように見るのは正しくありません。資本主義的生産様式の社会を正しく認識するうえで優劣をつけるべきものではありません。大谷氏のように「第三五章」に該当する部分が草稿の上段に書かれていたからといって、『資本論』の内容を矮小化すべきではないでしょう。

そして、これらの「章」で論究されているのは、Monied capital(利子生み資本)の運動の規定のされ方などではなく、資本主義的生産様式の社会における貨幣の流通手段としての側面を中心にしてみた、貨幣と経済との関係です。

④大谷氏は、エンゲルスの第33-35章の編集について、エンゲルスが「タイトルを立て」「混乱」等からまとめ上げたことを確認し、第35章については「この章立てに十分な理由がある」と言い「マルクスの草稿の意図を実現したものであったと見て差し支えないであろう。」(P47-48)とお墨付きを与えています。

続けて大谷氏は、次のようにエンゲルスの編集を褒めざるを得ません。

「エンゲルスが「混乱」および「[混乱。続き]」(および一部は「[地金と為替相場]」)から第33章と第34章をまとめた編集ぶりは、ただただ見事と言うほかはない。…青山略…エンゲルスにしてできたこの作業によって、第3部の第5篇は、草稿の状態からは考えられないほどの完成度の高いものに仕上がったのである。読者に完成度の高い、完結した第3部を提供するという観点から見れば、エンゲルスはまさに巨匠的な仕事をしたと言わなければならない。」(P50)

けれども、大谷氏は続けて、「しかし、これはメタルの一面であった。」と言い、「混乱」も「[混乱。続き]」も委員会証言の抜粋でしかないものであったのに、あたかもマルクスが第5章の本文として書いたものであるかのような外観が与えられた。さらに具体的に言えば、マルクスが「Ⅲ)」で提起しながら、まとまったかたちで答を書かないままに残した、「monied capitalの量と貨幣の量」との関係の問題にマルクスが答えているかのような外観が与えられた。」(P50)と言い、エンゲルスがこの編集に合わせて、「マルクスが、「信用制度とそれが自分のためにつくりだす、信用貨幣などのような諸用具との分析は、われわれの計画の範囲外にある」という文のなかの「分析」という語を「詳しい分析」に変え」たために、マルクス自身が、「詳しくはないけれども、「信用制度とそれが自分のためにつくりだす、信用貨幣などのような諸用具」そのものの分析は行なうのだ、と明言していることになってしまった」と言います。

そして、大谷氏は結論として、「だから、マルクスの『資本論』第3部第5章の構想をあるがままに知るという観点から言えば、『資本論』を完成したかたちで読者に提供するというエンゲルスの巨匠的な仕事は、同時に、マルクスの構想を覆い隠すという罪つくりな仕事でもあったのである。」と述べています。

この大谷氏の結論は、妥当なものなのでしょうか？

これまで見てきたように、「第3部の第5篇は、草稿の状態からは考えられないほどの完成度の高いものに仕上がったのである。読者に完成度の高い、完結した第3部を提供するという観点から見るかぎり、エンゲルスはまさに巨匠的な仕事をしたと言うべきであろう」と大谷氏も認めるとおり、エンゲルスによる第33章と第34章の編集によって『資本論』は立派に編集されました。あんなメモの塊から、本当に、よくも、あんな立派な二つの章を作れたものだと、ただただ感心するばかりです。脱帽。

しかし、大谷氏は、「これはメタルの一面」だと言い、「マルクスの構想を覆い隠すという罪つくりな仕事」だと言います。エンゲルスが第33章と第34章を編集し、「メタルの一面」である『資本論』のなかで「信用制度とそれが自分のためにつくりだす、信用貨幣などのような諸用具」について論及しているから、「詳しい分析」はしないという、それがなぜ、「マルクスの構想を覆い隠すという罪つくりな仕事」になるのか、私にはさっぱりわかりません。研究者である大谷氏は、エンゲルスによって「マルクスの構想」がどのように覆い隠されたのか、明確に述べる義務があります。

なお、大谷氏は、「混乱」の焦点が、「現実資本の運動が〈為替相場および地金の輸出入〉の変動を媒介してMonied capitalの運動をどのように規定するか、という問題である。」と言い、「マルクスの構想」の中心点が『資本論』の第35章にあると見ているようですが、③をもう一度ご覧いただきたいのですが、エンゲルスは第33章と第34章の編集をつうじて、第35章を「覆い隠すという罪つくりな仕事」などしていないことだけは申し上げておきます。

なお、「第三三章 信用制度のもとでの流通手段」の概要については [PDF ファイル](#) 「第三三章」の抜粋・概略等を、「第三四章 通貨主義と一八四四年のイギリスの銀行立法」の概要については [PDF ファイル](#) 「第三四章」の概略とポイント等を、是非、ご覧ください。

II、「第12章『貴金属と為替相場』（エンゲルス版第35章）に使われたマルクスの草稿について」での大谷氏の主張の検証

①前の章(第11章)の④に関連して、大谷氏は、「第35章 貴金属と為替相場」を独立の章として設けることがまず決まっています、そのうえで第33章と第34章の構想と内容とを詰めていったというのがことの次第であったであろう。上で見てきたところからすれば、第35章をまとめるエンゲルスの作業のうち、彼が第1の部分[a]（大谷氏が「第5章の本文の原稿として書かれたのではないか」と推測する、エンゲルスがほぼそのまま使った部分のこと——青山）を第1節にまとめたことは十分に了解できることである」（P189）と言って、エンゲルスが第33章と第34章の編集をつうじて、第35章を「覆い隠すという罪つくりな仕事」などしていない、適切な編集であったことを認めています。

そして、返す刀で、よせばいいのに、続けて、「第2節については、第1節に続いて「為替相場」という節を置きたいという彼の編集意図は痛いほどわかるにしても、それに使える材料は、本文として書いたもののなかにはまったくなく、抜粋ノートとして書かれた部分の記述だけからまとめあげなければならなかったのであって、そのかぎりでは、為替相場についてのマルクスのきわめて断片的な部分的叙述を、あたかも体系的な叙述の一部として書かれたものであるかのように仕立てざるをえなかったのであり、ここでもエンゲルスの作業の功罪について、メダルの表裏を見ないわけにはいかないのである。」と大谷氏の労作の洛陽の紙価を下げるようなことを言います。

私は、この文章を見て、司馬遼太郎の『花神』で村田蔵六が江戸を火の海にしないために火薬を撤去する提案をしたとき薩摩の家老海江田某(不確かです)が「もったいない」と反対したのに対し、蔵六が海江田某(不確か)を「この人は何を考えているのだろうか」と蔵六の大きなおでこで海江田某の頭の中をのぞき込んだというような文章があるのを思い出しました。大谷氏は、エンゲルスが立派に『資本論』を編集したことを「功」と見ているのでしょうか、それとも「罪」見ているのでしょうか、海江田某のようにたんに言いがかりを付けるだけの人物なのでしょうか。

②大谷氏は、マルクスの「草稿では、流出入の運動による諸国の蓄蔵への地金の再配分が「さまざまな作用によって媒介される」ことについて、「すでに為替相場の逆転のところで言及した」、と書かれている」が「エンゲルスは、彼の版のこれ以前のところにある当該の箇所を見いだすことができなかった」ので、「これらの事情は為替相場を論じるさいに言及される」（大月版⑤P735——青山）と変更した」が、「第2節 為替相場」を「読んでみても、そのなかに「これらの事情」に言及している箇所は見あたらない。」と言って、今度は草稿にないことを要求して、その不備を指摘しています。これなら、エンゲルスがどんな編集をしても必ず批判（？ケチを付けること？）することができます。

大谷氏は、「これらの事情」について上記のように言うだけで、「これらの事情」について何も語ってくれないので、大谷氏の頭の中に何があるのか分からないが、「これらの事情」に言及している箇所は見あたらない」というのは正しくない。

一緒に、『資本論』の「第2節 為替相場」を見てみよう。

まず、『資本論』は、「利子率の運動」と「金属準備や為替相場の運動」の関係につい

て、「ハッパードの表は、利子率と商品価格とはまったく互いに無関係な運動をするが、利子率の運動は金属準備や為替相場の運動に正確に適合するということを証明している。」(大月版⑤ P760)と述べ、外国為替相場の変動要因について次のように指摘している。

「外国為替相場は次のような事情によって変動することがありうる。

(1) 当面の国際収支によって。……

(2) 一国の貨幣の減価によって。……

(3) 二つの国の一方は『貨幣』として銀を使用し他方は金を使用している場合には、この二つの国のあいだの為替相場はこの二つの金属の相対的な価値変動によって左右される。」(同 P764)

そして最後に、「重金主義は本質的にカトリック的であり、信用主義は本質的にプロテスタント的である。……プロテスタント教がカトリック教の基礎から解放されないように、信用主義も重金主義の基礎から解放されないのである。」(同 P765)と、資本主義的生産様式の社会のなかで泳ぐ「経済理論」を痛烈に批判しています。

大谷氏は、これでも、「それらの事情」に言及している箇所は見あたらない」と言い張るのでしょうか。

③大谷氏は、マルクスが草稿で「貴金属の流入については次のことを注意しておきたい。」と述べて九つの点を挙げたあとのページを変えての『エコノミスト』からの二つの引用について、その後の草稿との繋がりが見えないので、「エンゲルスは第1の引用を彼の版に取り入れなかったし、第2の引用もここから切り離して第34章に利用している。」(P200)と、エンゲルスを非難(?)しています。

「第1の引用」とは、「もし、イングランド銀行が銀行券を発行しない銀行であって、ただ金属流通 [がある] だけだったなら、」として、イングランド銀行に「地金の流入」がある場合と「地金の流出」がある場合のイングランド銀行の対応を述べたものです。(P273 参照)

「第2の引用」とは、「スコットランドの諸銀行は遊休している現金残高をロンドンにある自分の代理店、たとえばジョーンズ・ロイド商会に預けておく。この代理店はそれを [イングランド] 銀行に預けておく。このことはスコットランドの銀行に、この金額の範囲内で、イングランド銀行の地金にたいする支配力を与えるのであって、ここには、必要な場合にはいつでも対外支払いに応じることができる用意があるわけである。」という文章です。

そして、大谷氏は、「第1の引用」は「地金」の **moneyed Capital** としての機能を述べたものであり、草稿のつぎの内容「貨幣形態にある資本としての貴金属」に繋がるものであり、「第2の引用」も草稿のつぎの内容「ゆれている天秤の……」の原因を具体的に述べたものだから、「マルクスのここでの論述の流れから離れたメモ書き的抜粋ではなく、それの一部をなしているものであることが明らかとなる。」と言います。

マルクスから天才と言われ、『資本論』をこのように立派に編集したエンゲルスが、大谷氏の言う「第1の引用」と「第2の引用」が、「マルクスのここでの論述の流れから離れたメモ書き的抜粋」でないことは十分理解していたはずですが。エンゲルスが『資本論』に「取り入れなかった」のは、「第1の引用」の「もし、イングランド銀行が銀行券を発

行しない銀行であって」などという文章を草稿の中に入れて、あえてややこしくしなくてもよいと考え、「第2の引用」についても、草稿の中に有効に位置づけることができないと判断したからでしょう。

エンゲルスの足りない点を挙げるとすれば、後々大谷氏のような人が出てくることに備えて、「第1の引用」と「第2の引用」を「注」の形で、蛇足的に『資本論』に付記しておけばよかったのかもしれない。

つづけて大谷氏は、「そこで、ここまでのところを要約しよう。」と言って、「第5篇 利子生み資本」の「第35章 貴金属と為替相場」という地金(貴金属)についての総合的な論究の中の「第1節 金準備の運動」の途中の段階で、(草稿が)「地金が moneyed Capital の形態であることによって行なう作用を挙げ、これによって「5)信用。架空資本」での moneyed Capital 論を締めくくっているのである。」(P204)と述べて、金準備の運動を「moneyed Capital 論」として、締めくくってしまいます。

しかし、これまでの「金準備の運動」を単なる「moneyed Capital 論」に単純化してしまうのは誤っています。

マルクスは、まず、「貴金属」という特殊な「商品」の流出入について「貴金属の流入については次のことを注意しておきたい。」と述べて、資本主義的生産様式の社会での「貨幣の中の貨幣」の特質にかかわる九つの点を挙げ、続けて、①「貨幣形態にある資本としての貴金属の独自の性格」による作用と②「信用・銀行制度の発達」のもとでの「いわゆる国立銀行の金属準備」の「三重」の「使命」(上記の九つの注意点の第5。)による地金という貨幣の極端な節約とその結果について、産業循環との関連で論及しています。

そして、これらの論及はこの節——金準備の運動——のマルクスの最後の言葉、「すべての手形等々を銀行貨幣に、そしてすべての銀行貨幣を金に、一気に転換できるようにすることが要求されるのである。{それに加えて諸商品をも[そうできるようにすることが要求される。]}」をエンゲルスが見事にまとめ上げた、「恐慌のときには次のような要求が現れる。すなわち、すべての手形や有価証券や商品を一度に同時に銀行貨幣に換えることができるべきであり、さらにこの銀行貨幣をすべて金に換えることができるべきである、という要求がそれである。」という文章に繋がっています。だから、これまでの「金準備の運動」の内容を「moneyed Capital 論」に単純化してしまうのは、「金」の「運動」を全面的に捉えようとするマルクス・エンゲルスの意図とは異なるものです。

④青山の“資本主義的生産様式の矛盾”としての注目点について(P228)

資本主義的生産様式が「再生産過程の強力的な拡張のこの人為的なシステム」であるという宿命は、資本主義的生産様式が社会的に生産しているにもかかわらず、「生産が現実には社会的な過程として社会的な統制に服していないという事情」と同義語であるということを示しています。このこと(矛盾)の意味をしっかりと考えて下さい。

⑤大谷氏による、マルクスの新しい社会システムの概括

大谷氏は、マルクスの言う新しい社会システムについて、「それは、「生産手段の共同的所有」ではないことに注目！——引用者(大谷氏のこと——青山)」と制御との基礎のうえでアソーシエイトしている諸個人」が、「相互のあいだに労働を分配」し、

「社会的生産を自分たちの共同の能力として管理」し、自分たちのもとに「包摂」している「アソシエーション」であって、ここでは「諸個人の生産は直接に社会的である」。しかも、このような「アソシエーションはなんら恣意的なもの」、すなわち意識のなかで構想されたものではなく、「交換価値に立脚するブルジョア社会の内部で、そっくりそのままこの社会を爆破するための地雷でもあるような交易諸関係ならびに生産諸関係が生みだされる」のであって、一定の「物質的条件および精神的条件の発展」のもとで必然的に生まれるものなのである。」と概括しています。

ここで忘れてならないのは、資本主義的生産様式の社会が「社会的生産」を「資本の力で管理」しているのにたいし、新しい社会システムの社会の「社会的生産」の「管理」は「社会的生産を自分たちの共同の能力として管理」するということです。皆さんは、このことの意味をしっかりと考えて下さい。

⑥大谷氏は、『資本論』の「第2節 為替相場」の草稿の解説のところで、「このような観点から見れば、為替相場についてのこれらの言及も、「5、信用。架空資本」の本論をなす、moneyed Capital(信用制度下の利子生み資本)論の一部をなしていると言わなければならない。」と言います。

大谷氏は、③で見たように、「第1節 金準備の運動」の途中で、「地金が moneyed Capital の形態であることによって行なう作用を挙げ、これによって「5)信用。架空資本」での moneyed Capital 論を締めくくっているのである。」(P204)と述べて、マルクスが「金準備の運動」を述べている途中で「「5)信用。架空資本」での moneyed Capital 論」を、勝手に、締めくくってしまいましたが、今度は「第2節 為替相場」が「「5、信用。架空資本」の本論をなす、moneyed Capital(信用制度下の利子生み資本)論の一部をなしている」と言うのです。

『資本論』の「第5篇 利子生み資本」のなかの「第35章 貴金属と為替相場」の「第1節 金準備の運動」と「第2節 為替相場」のなかで、地金の貨幣資本としての機能を明らかにするのは、「貴金属(地金)」を含む「貨幣」をめぐる「混乱」を明らかにするうえで、あたりまえのことです。

そして、「第35章 貴金属と為替相場」では「貴金属(地金)」とは何か、ということを中心に「混乱」を解明しています。だから私は、③でも、「金準備の運動」の内容を「moneyed Capital 論」に単純化してしまうのは、「金」の「運動」を全面的に捉えようとするマルクス・エンゲルスの意図とは異なり、「金準備の運動」の一部を「moneyed Capital 論」に単純化するのは誤っていることを指摘してきました。第33章～第36章を単に「moneyed Capital 論」などと言ったのでは、私たちに資本主義的生産様式の社会での「貨幣」の機能を全面的に捉えさせようとするマルクス・エンゲルスの意図を理解していないことになってしまいます。

⑦「第2節 為替相場」は、「貨幣金属の国際的運動のバロメーターは周知のように為替相場である。……この貴金属輸出がいくらか大きくなり、いくらか長く続くならば、イギリスの銀行準備は減らされて、イギリスの貨幣市場は、イングランド銀行を先頭として、防衛策をとらなければならない。この防衛策は、すでに見たように、おもに利子率の引上

げである。」(大月版⑤ P741)というエンゲルスの補筆からはじまり、続けて、草稿からの「貴金属の輸出が為替相場に及ぼす影響」と「資本一般の輸出が為替相場に及ぼす影響」について、「商品の価格と貨幣利子」の関係についてのウイルソンの謬論の批判のあと、「ハッパードの表は、利子率と商品価格とはまったく互いに無関係な運動をするが、利子率の運動は金属準備や為替相場の運動に正確に適合するということを証明している。」(P760)と、「金属準備や為替相場と利子率」と「利子率と商品価格」の関係について論及されます。

そして、最後に、外国為替相場は、(1)当面の国際収支によって、(2)一国の貨幣の減価によって、(3)二つの国の一方は『貨幣』として銀を使用し他方は金を使用している場合には、この二つの国のあいだのこの二つの金属の相対的な価値変動によって、変動することがありうることを述べ、「重金主義は本質的にカトリック的であり、信用主義は本質的にプロテスタント的である。……プロテスタント教がカトリック教の基礎から解放されないように、信用主義も重金主義の基礎から解放されないのである。」(P765)と、価値の体現者としての「貴金属(地金)」のもとでの信用であることを見事に表現して「第2節 為替相場」は結ばれています。

この『資本論』「第2節 為替相場」について、大谷氏は、「われわれの目の前に残された第3部草稿に関するかぎり、マルクスの為替相場への言及は、「為替相場」という表題をもつ章なり節なりにまとめることができるような質のものでもなければ、それができるだけの量もなかった。エンゲルスは彼の版の第35章で「第2節 為替相場」という独立の節を設けることによって、マルクスのきわめて限られた断片的記述をマルクスの「為替相場論」なるものとして読者に提供することになった。ここにもエンゲルス版が果たした役割の消極面を見ないわけにはいかない。」と、言います。

かいつまんで言うと、「第3部草稿」には「為替相場論」を展開できるだけの内容もボリュームもないのに、エンゲルスが「第3部草稿」からマルクスの「為替相場論」を作りマルクスの「為替相場論」のように私たちに思わせたことは、『資本論』の「消極面」(＝良くない面⇔わるい面)だということです。

この論調には、大きなトリックがあります。私の要約をご覧いただければ分かります、また『資本論』の構成を見て頂ければ分かるように、「第2節 為替相場」は「第35章 貴金属と為替相場」のなかの「節」で「貴金属(地金)」と「為替相場」との関係を「混沌」に関わる草稿を使って大雑把に論及したものです。だから、『資本論』のこの部分を読んだ人はそのように理解し、違和感なく読んで、大谷氏以外——いや、もしかしたらもう一人、不破さんがいるのかもしれませんが——はこの「節」を独立したマルクスの「為替相場論」だなどと思う人はいないでしょう。このように大谷氏の論立ては、「マルクスの「為替相場論」というフィクションを作ることによって成り立っています。

それでは次に、『資本論』の構成に「第2節 為替相場」が置かれていることの是非を考えてみましょう。

①で見たように、これまで、エンゲルスが第33章と第34章の編集をつうじて第35章を「覆い隠すという罪つくりな仕事」をしたと言っていた大谷氏も、「第1節 金準備の運動」のエンゲルスの編集について、「第35章をまとめるエンゲルスの作業のうち、彼が第1の部分[a](大谷氏が「第5章の本文の原稿として書かれたのではないかと推測する、

エンゲルスがほぼそのまま使った部分のこと——青山)を第1節にまとめたことは十分に了解できるところである」(P189)と評価し、「第2節については、第1節に続いて「為替相場」という節を置きたいという彼の編集意図は痛いほどわかる」と「第2節 為替相場」を置くことの必要性を認めています。

そして、「混沌」に関わる草稿を見て、エンゲルスはよくもまあこれほど立派に「第2節 為替相場」を仕上げたものと驚嘆し、感謝しているのは、ほとんどすべての『資本論』読者の共通した認識ではないでしょうか。

なお、大谷氏が「第2節 為替相場」を本当に独立したマルクスの「為替相場論」だと思っているのだとしたら、科学的社会主義の研究者として「ここにもエンゲルス版が果たした役割の消極面を見ないわけにはいかない」などと呑気なことをいっている場合ではないのではないか。「ここにもエンゲルス版が果たした役割の消極面を見ないわけにはいかない」という言葉以外に何も示さず、科学的社会主義の経済学を発展させようとしない大谷氏は「消極的」人間なのか、それも科学的社会主義とは無縁なマルクス・エンゲルスと『資本論』に対する単なる冷やかし屋なのか、その立場が問われるところです。

〈参考〉「第2節 為替相場」の概要

「第2節 為替相場」は、「貨幣金属の国際的運動のバロメーターは周知のように為替相場である。……この貴金属輸出がいくらか大きくなり、いくらか長く続くなれば、イギリスの銀行準備は減らされて、イギリスの貨幣市場は、イングランド銀行を先頭として、防衛策をとらなければならない。この防衛策は、すでに見たように、おもに利率の引上げである。」(大月版⑤ P741)というエンゲルスの補筆からはじまります。

続けて、草稿の「貴金属の輸出が為替相場に及ぼす影響」と「資本一般の輸出が為替相場に及ぼす影響」についてのウイルソンの謬論を批判します。

なお、「為替相場が変動しても利率は不変でありうるし、また利率が変動しても為替相場は不変でありうるのである。」(P750)と述べられていますが、貨幣流通量を中央銀行が変えずに、為替相場または利率が変動した場合は、「為替相場」と「利率」との間には相関関係があります。

そして、ウイルソンは「商品の価格と貨幣利子」の関係について、「商品が多すぎれば貨幣利子は低くなければならないし、商品が乏しければ貨幣利子は高くななければならない」というが、「物価の下落が利子の下落と同じだということ」はない。むしろ、「この二つが同時に並存することもありうる。しかし、その場合には、産業資本の運動が起きる方向と、貸付可能な貨幣資本の運動が起きる方向との対立の表現として並存するにであって、それらの同一性の表現としてではないのである。」「商品の貨幣価格が低いことと利率が低いことは、必ずしも一体をなしてはいないのである。」(P756-759)とマルクスはいます。要注目!!※利率を低くすれば産業資本の運動が起きる分けでもないし、利率を低くすれば物価が低くなる分けでも高くなる分けでもありません。安倍のミックスの三本の矢の第一の矢として世界の先頭を切って、ノーザルの、金融緩和を行なっても、本当の意味での——労働者にもその恩恵のおこぼれがくるような——好景気など来ず、一時しのぎの「好景気」でしかないことが、見事にそのことを証明しています。

続けて、「ハッパードの表は、利率と商品価格とはまったく互いに無関係な運動をするが、利率の運動は金属準備や為替相場の運動に正確に適合するということを証明して

いる。」(P760)と、「金属準備や為替相場と利子率」と「利子率と商品価格」の関係について述べます。

そして最後に、外国為替相場は、(1)当面の国際収支によって、(2)一国の貨幣の減価によって、(3)二つの国の一方は『貨幣』として銀を使用し他方は金を使用している場合には、この二つの国のあいだのこの二つの金属の相対的な価値変動によって、変動することがありうることを述べ、「重金主義は本質的にカトリック的であり、信用主義は本質的にプロテスタント的である。……プロテスタント教がカトリック教の基礎から解放されないように、信用主義も重金主義の基礎から解放されないのである。」(P765)と述べて、価値の体現者としての「貴金属(地金)」のもとでの信用であることを見事に表現して「第2節 為替相場」は結ばれています。

※なお、「第35章 貴金属と為替相場」のより詳しい内容は [PDF ファイル「第三章の抜粋と要約等」](#)を、是非、ご覧ください。

⑧大谷氏は、マルクスが「地金を moneyed Capital」と見ているから、この章は「信用制度下の利子生み資本 = moneyed Capital」の分析の最後の部分を——そしてまた同じ観点から、「moneyed Capital と実物資本」の最後の部分とみるなら「Ⅲ」の最後を——なしているということになる。」(P255)と言います。

これまで大谷氏は、③で見たように、「第1節 金準備の運動」の途中で、「地金が moneyed Capital の形態であることによって行なう作用を挙げ、これによって「5)信用。架空資本」での moneyed Capital 論を締めくくっているのである。」(P204)と述べて、マルクスが「金準備の運動」を述べている途中で「5)信用。架空資本」での moneyed Capital 論」を、勝手に、締めくくってしまい、⑥では、「第2節 為替相場」が「5、信用。架空資本」の本論をなす、moneyed Capital(信用制度下の利子生み資本)論の一部をなしている」と言ったかと思うと、⑦では、「エンゲルスは彼の版の第35章で「第2節 為替相場」という独立の節を設けることによって、マルクスのきわめて限られた断片的記述をマルクスの「為替相場論」なるものとして読者に提供することになった」と言って「第2節 為替相場」を否定するという、首尾一貫しないことを言ってきました。

そして今度は、「この章」——『資本論』「第35章 貴金属と為替相場」のこと——が「信用制度下の利子生み資本 = moneyed Capital の分析の最後の部分」だということです。

この大谷氏の認識には、重大な欠陥があります。科学的社会主義の経済学の論究は資本主義的生産様式の社会での経済の運動法則を明らかにし、その根本原因を解明して新しい生産様式の社会を展望することです。そして、残念ながら、『資本論』の「第35章」まででは「利子生み資本」の資本主義的生産様式の社会のもとでの「分析」はありますが、新しい生産様式の社会での「利子生み資本」の運命——「利子生み資本」はどうなるか、「利子生み資本」をどうするかということ——については触れられていません。『資本論』を学ぶ重要な意義は、資本主義的生産様式の社会での経済の運動法則を理解し、新しい生産様式の社会での経済の運動法則を展望することです。大谷氏の上記のような言葉は、そのような認識を欠いた『資本論』についての浅薄な見方の現れです。

次の「第三章 資本主義以前」は「資本主義以前」だけを扱っているではありません。「第三章」はその後半で、あらためて、資本主義的生産様式のもとでの信用と貨幣

との関係と信用制度のもつ意味を再確認し（大月版 P782-783 参照）、結合労働の生産様式の社会への槓杆としての信用制度の役割とともに、「生産手段が資本に転化しなくなれば（このことのうちには私的土地所有の廃止も含まれている）、信用そのものにはもはやなんの意味もないのであって、これはサン・シモン主義者たちでさえも見抜いていたことである。他方、資本主義的生産様式が存続するかぎり、利子生み資本はその諸形態の一つとして存続するのであって、実際にこの生産様式も信用制度の基礎をなしているのである。」（同、P783-784）と述べて、「利子生み資本」の問題を資本主義的生産様式における搾取の諸形態の一つとして位置づけ、「第7篇 諸収入とそれらの源泉」へと繋げています。

ここで重要なことは、「資本主義的生産様式が存続するかぎり、利子生み資本はその諸形態の一つとして存続する」ということ、「生産手段が資本に転化しなくなった」新しい生産様式の社会、つまり、私的財産権にもとづく企業の支配が廃止され企業への国民の民主的参加による企業経営が実現した社会では、「利子生み資本」の概念そのものが消滅するということです。

私たちは大谷氏の言う草稿の「5)信用。架空資本」、『資本論』の「第5篇」からこのことをしっかりと学ばなければなりません。

⑨なお、大谷氏は、「資本主義的生産様式のもとでの再生産的資本と moneyed Capital との分析を踏まえたうえでの、世界貨幣すなわち「世界市場貨幣」の考察とは、とりもなおさず、地金の国際的運動とそれを反映する為替相場の変動の考察である。その意味では、この第35章原草稿は、「資本の一般的分析」、「資本主義的生産の一般的研究」としての『資本論』枠内で、国際貿易および世界市場の分析に歩を進めるための基礎であり、この枠内での世界貨幣論の締めくくりという位置を占めるものである。」(P255-6)とも言っています。

大谷氏は、ここで言っている自分の言葉の意味をちゃんと理解しているのであれば、⑦で抜粋したような、「第2節 為替相場」が無駄な「節」であり、「第2節」を設けることによってマルクスがそこで「為替相場論」を展開しているかのような誤解を読者に与えることになったという主張を自ら否定したということです。

⑩大谷氏は、「「混乱」などの材料集録部分を除いて「5)信用。架空資本」の構成を示せば、次のようにまとめることができるであろう。」(P258)と述べ、「研究者」として、——エンゲルスのようにマルクスの草稿のなかの『「混乱」』からあとの、そしてすでにそれ以前の箇所に取り入れられなかったかぎりでの、すべてのこれらの材料(覚え書きや注意書きや抜き書きの形での材料を含む——青山)から、私は第三三～三五章をまとめ上げ(エンゲルス序文)で、『資本論』を一般の読者が理解できるように編集したのとは違って——草稿とその中に含まれている「覚え書きや注意書きや抜き書きの形での材料」(エンゲルス序文)と思われる第33章～第34章を除いた『資本論』の構成を示しています。

しかし、忘れてならないのは、大谷氏も「エンゲルスが「混乱」および「[混乱。続き]」(および一部は「[地金と為替相場]」)から第33章と第34章をまとめた編集ぶりは、ただただ見事と言うほかはない。…青山略…エンゲルスにしてできたこの作業によって、第3部の第5篇は、草稿の状態からは考えられないほどの完成度の高いものに仕上がったので

ある。読者に完成度の高い、完結した第3部を提供するという観点から見れば、エンゲルスはまさに巨匠的な仕事をしたと言うべきであろう。」(P50)と、褒めている第33章と第34章を得て『資本論』は「読者に完成度の高い、完結した第3部を提供する」こととなったのです。

同時に「第35章」は、大谷氏の言うマルクスの草稿部分である「C 地金と為替相場。貨幣システムによる信用システムの被制約性〔第35章〕」、つまり、『資本論』の「第1節 金準備の運動」だけでは、「読者に完成度の高い、完結した」「第35章」として『資本論』を提供することはできません。

なぜなら、大谷氏も、先に指摘したように、「資本主義的生産様式のもとでの再生産的資本と moneyed Capital との分析を踏まえたうえでの、世界貨幣すなわち「世界市場貨幣」の考察とは、とりもなおさず、地金の国際的運動とそれを反映する為替相場の変動の考察である。その意味では、この第35章原草稿は、「資本の一般的分析」、「資本主義的生産の一般的研究」としての『資本論』枠内で、国際貿易および世界市場の分析に歩を進めるための基礎であり、この枠内での世界貨幣論の締めくくりという位置を占めるものである」(P255-6)と言っていますが、そのためには、「第2節 為替相場」の内容は必要不可欠からです。

⑪マルクスの草稿と『資本論』との違いを一生懸命に探究してきた——そのこと自体は大変意味のある、ご苦労な仕事であるが——大谷氏は、この章「「貴金属と為替相場」に使われたマルクス草稿」の最後の節「14 moneyed capital と貨幣量との関連の問題」で、「moneyed capital と貨幣量との関連」についての答えをマルクスが出していないことを述べ、ならば、マルクスの草稿と『資本論』との違いを探究してきた自らの成果を生かして科学的社会主義の経済学の観点から「moneyed Capital と貨幣量との関連」についてマルクスの考えを整理して私たちに教えてくれるのかと思いきや、次のように言って、この「章」を結んでいます。大変ビックリするというか、呆れるばかりです。

「この両者(moneyed Capital と貨幣量——青山)は moneyed capital の運動と実物資本の運動との絡み合い——(青山が略す)——のなかで、どのように区別され、かつ関連しあっているのか、ということが問われることになる。現代の資本主義諸国とその絡み合いの全体としての現代資本主義世界のなかでこの問題を分析するためには、……青山の略……理論的に解明されていなければならないであろう。筆者は、マルクスが提起した、moneyed capital と貨幣量との関連という問題は、このような現代の課題に連携するものではないかと考えている。」と言うのです。大谷氏は、何か意味のあることを言うのかと思ったら、言葉の羅列はあるが、何も言っていないのです。このような文章を読んで、大いに呆れないとしたら、相当の鈍感力の持ち主と言うことができるでしょう。

大谷氏の結びの文章があまりにもお粗末なので、科学的社会主義の経済学の観点から「moneyed Capital と貨幣量との関連」について、次の2点に絞って、極々簡単に整理しておきます。

①貨幣資本の利子の決まり方について

貨幣資本の利子は、貨幣資本の需要と供給によって決まります。

貨幣資本の需要は、生産活動のための実需、マネーゲームのための必要、支払手段の逼

迫によって生まれ、貨幣資本の供給は、経済の好循環での経済の拡大、資金需要の減退による貨幣の金融機関への滞留、中央銀行の市中への貨幣の供給によって拡大し、貨幣資本の利率が低ければ貨幣資本の需要は喚起され、高ければ抑制されます。

②必要な貨幣量と貨幣量の増減がもたらす効果について

貨幣の必要量は決済の規模に比例し、信用の拡大に反比例します。

貨幣の量が必要量を上回ると貨幣の金融機関への滞留が起これり貨幣資本の利率を引き上げる要因になり、貨幣の量が必要量を下回ると市中の貨幣が逼迫して貨幣資本の利率を引き上げる要因になります。

貨幣量の増加は、それによって貨幣資本の利率が下がり、相対的に貨幣の価値が下がり、マネーゲームが活発になって資産価値の上昇をもたらすと、一時的な需要拡大の要因となります。

これらは、マルクス・エンゲルスの『資本論』での産業循環についての論及のなかで説明されていることです。もちろん、私たちが、マルクス・エンゲルスの時代は貨幣の兌換性があり、現代はドルが基軸通貨であるという点や、この違いにもとづく貨幣と信用の自由度の違いによる経済現象の現れ方の違いに留意しなければならないというのは、当然のことです。

⑫最後に、大谷氏のこの章(第 12 章)で扱われているマルクスの草稿の大谷氏による翻訳と注記(「第 35 章の草稿、それとエンゲルス版との相違」)——それは、エンゲルスの『資本論』編集の苦勞と能力の高さをあらためて実感させてくれる大谷氏の大変な労作であり、貴重な文献です——を皆さんが読むことが出来ないのは残念ですが、この「翻訳と注記」を読んでの感想を一言述べさせていただきます。

エンゲルスは、ここで大谷氏が翻訳した草稿の数カ所を単独で、また、「混乱」のなかでの文章と合わせて「第 3 3 章」で使用するとともに、「第 3 5 章」の体裁を整え理解を助けるために草稿の他の箇所からの挿入とその説明と草稿中の「証言」の要約とその補足説明を数多く行なっています。

そしてエンゲルスは、内容を分かりやすくするために、草稿では「天秤を一方または他方の側に押し下げる羽毛」となっているのを「ゆれている天秤の一方の皿に(羽)毛一枚の重さを加えてもそれを決定的に一方に傾かせるのに十分だというその羽毛」(P279、大月版⑤P737参照)と丁寧に説明したり、「これらの投資が行なわれること自体がすでに信用の過度緊張の兆候である等々のかぎりでのことであろう。」(P295)となっているのを「これらの投資が一般にすでに信用の過度の緊張や**思惑的操作の開始**の兆候であるかぎりでのことであろう。」(大月版⑤P746参照)と「思惑的操作の開始」という言葉を補足して内容を一層深めるだけでなく、多くの重要な「書き込み」を加えることによって「第 3 5 章」の編集を立派に成し遂げました。

大谷氏の労作「翻訳と注記」を読んで、大谷氏に感謝するとともに、本当にエンゲルスに頭が下がる思いが致しました。

Ⅲ、「第13章『資本主義以前』(エンゲルス版第36章)に使われたマルクスの草稿について」での大谷氏の主張の検証

大谷氏と話をかみ合わせるために、まず、『資本論』第三部「第36章」の極々大雑把な概要から見て頂きたいと思います。

「第三十六章 資本主義以前」の概要

「第三十六章」は、まず、高利資本について、その存立条件、存在形態、社会的影響を述べ、民衆の憎悪が「古代世界で最も激しかった」「高利」の歴史的意義について、「資本主義以前のすべての生産様式のもとで高利が革命的に作用するのは、ただ、高利が所有形態を破壊し分解するからである。」(大月版⑤ P770)ことを述べます。

続けて、信用制度と高利資本と企業家支援の根拠について述べたあと、資本主義の発展にともなう信用制度の発展の歴史に論を進め、あらためて、信用と貨幣との関係と信用制度のもつ意味に戻り、「銀行制度によって、資本の分配は、私的資本家や高利貸の手から、一つの特殊な業務として、社会的な機能として、取り上げられている。しかし、これによって同時に銀行と信用とは、資本主義的生産をそれ自身の制限を越えて進行させる最も強力な手段となり、また恐慌や思惑(詐欺的幻惑)の最も有効な媒介物の一つとなるのである。」(同 P782-783)ことを確認します。

そして最後に、結合労働の生産様式の社会への槓杆としての信用制度の役割を明らかにするとともに、「生産手段が資本に転化しなくなれば(このことのうちには私的土地所有の廃止も含まれている)、信用そのものにはもはやなんの意味もないのであって、これはサン・シモン主義者たちでさえも見抜いていたことである。他方、資本主義的生産様式が存続するかぎり、利子生み資本はその諸形態の一つとして存続するのであって、実際にこの生産様式も信用制度の基礎をなしているのである。」(同 P783)と述べて、利子生み資本の未来、その消滅した社会を展望します。

つまり、資本主義的生産様式から結合労働の生産様式の社会へ移行が行なわれるということは、信用制度の基礎をなす生産様式がなくなり、生産手段が資本に転化しなくなり、貨幣が利子を生まなくなるということです。貨幣が利子を生むことを前提とする「信用制度」はもはやなんの意味もなくなります。つまり、第二十八章で述べられている資本主義的生産様式のもとで貨幣がもっている、①流通手段、②価値表現、③資本の循環形態の一局面である貨幣資本、④利子生み資本としての貨幣資本という四つの機能から③と④の機能がなくなるということです。そして、新しい生産様式の社会はそのことを法的に保証し、人民の企業のコントロールによってそのことを担保しなければなりません。

このように「第三十六章 資本主義以前」は、新しい生産様式の社会を展望する科学的社会主義の理論の理論的核心に論及した、注目すべき章です。

これらを踏まえて、大谷氏の主張を見ていきましょう。

①大谷氏は『資本論』「第三十六章 資本主義以前」に関わるマルクスの草稿について、「しかし内容的には、テキストとして書かれたと見られる上半部での叙述も抜粋ノートに近い部分を含んでおり、しっかりした構想にもとづいて仕上げられたものと見るのは困難である。」と言い、「全体としては大きな筋道が認められるが……高利資本についての部分では『1861-1863年草稿』での記述をかなり利用していることもあって、そうした筋道をしっかりとした足取りで絶えず前方に向かって進んでいるとは言い難く、あちこちに、思い

ついた事柄を書きとめたと見えるところがある。……このような意味では、この部分もやはり草稿性がかかなり高く、マルクスがここで書こうと考えていたものからすればなお未完成なものにとどまっていると見るべきであろう。」(P375)と言います。

まずはじめに、「抜粋ノートに近い部分を含んで」いることと「しっかりした構想にもとづいて仕上げられたもの」とはまったく無関係で、「抜粋ノートに近い部分を含んで」いることが「しっかりした構想にもとづいて仕上げられたもの」と見るのは困難である」理由にはなりません。なおかつ、大谷氏自身も「全体としては大きな筋道が認められる」ことを認めています。前掲の大雑把な「概要」で見たとおり、エンゲルスの編集によって、全体としての「大きな筋道」に沿って、立派に仕上げられています。

また、草稿が「草稿性がかかなり高い」のは当たり前で、マルクス自身も「草稿」はもともと荒削りなものであることを認めており、その意味で「未完成」なものに間違いありません。しかし、「あちこちに、思いついた事柄を書きとめたと見えるところがある」からといって「筋道をしっかりとした足取りで絶えず前方に向かって進んでいる」とは言い難いと言うのも、「抜粋ノートに近い部分を含んで」いるから「しっかりした構想にもとづいて仕上げられたもの」と見るのは困難である」と言うのと同様に、まったく、正しくありません。

エンゲルスは立派に編集しているのですから、問題はむしろ、大谷氏の理解力にこそあるように思われます。

②大谷氏は、「商業資本についても利子生み資本についても現代的土地所有についても」と、現代にまで拡張して「資本の二次的形態である商業資本」は「自身がどのようにして自己の諸前提を自己の結果として生み出すことによって自己を再生産しているのか、という、」「主体としての運動は問題にならない。」(P383)と言います。

しかし、現代の資本主義はユニクロのように「生産的資本」を「商業資本」が「従属」させる場合もあれば、トヨタのように「生産的資本」が「商業資本」(販売店)を「従属」させる場合もあり、巨大プラットフォームの存在も含めて生産の社会化、生産の社会的性格が深化しており、富は労働者が生産することによって生み出されることには変わりはありませんが、「生産的資本」が「資本」として常に優位な地位にいるわけではありません。

③大谷氏は、信用制度の創造によって「産業資本が利子生み資本を自己に従属させる」歴史的過程について、マルクスを次のように言って責めます。

「それではマルクスは、いったい、国家権力を利用した利子率の強力的な引き下げとは異なる、どのような歴史的過程を、「産業資本に特有な形態」である信用制度の創造によって「産業資本が利子生み資本を自己に従属させる」と考えていたのだろうか。率直に言って、マルクス自身は、このことをはっきりと読み取ることができるような記述を、この「6)」でも、またそのほかのどこでも書いていない。」(P427)、と。

そして、大谷氏は、草稿に「信用制度を創造しようとするもろもろの試みについての引用やコメント」があることを認めただうえで、「次に引用するものがそのすべてである」と言って、第一に、「中世に利子について」という「小見出し」の他者の著書からの抜粋—

—大月版『資本論』⑤の「中世の利子」(P787-790)の中のM・オジエ『公信用について』(P789)の部分——から、商業が発展しているところでは、早期に信用制度が発展し、「信用制度はどこでも、海外貿易および海外市場の発展に比例して発展した」ことが述べられ(この部分はエンゲルスは省略している)、続けて、「海外貿易および海外市場の発展に比例して発展した」「ヴェネツィアによって与えられた実例」が「急速に模倣され」て「その独立とその商業とによって名をなしていたすべての都市が、その最初の銀行を設立した」ことを述べた部分と、第二に、『資本論』の本論(P776)で「12世紀および14世紀にヴェネツィアやジェノヴァでつくられた信用組合」の意義をマルクスが述べた部分と、第三に、同じく『資本論』の本論(P777)で「経済的発展の模範国として認められていた」「オランダでは商業や製造工業といっしょに商業信用や貨幣取扱業が発展し」「利子生み資本は発展そのものによって産業資本や商業資本に従属させられていった。」ことが述べられているところの3カ所を草稿から引用します。

この3カ所の引用文から、大谷氏は以下のような結論を引き出します。

それは、①「高利貸に対抗して、それから独立した貨幣取扱業のための諸施設を設ける動因となったのは、国内商工業の発展ではなく(マルクスはそんなことは言っていない——青山)、遠隔地間の貿易に携わる商業資本の発展だとされる。」と言い、②「ここで挙げられているそうした信用諸機関は、一つの例外もなくすべて貨幣取り扱いを行なう信用機関である。」であり、③「そのうちの「都市共和国(ヴェネツィアやジェノヴァのこと——青山)に設けられた本来の銀行」については、それが「公信用のための施設」でもあったことが特記(信用組合をつくることによって、「自分たち自身と同じく自分たちの政府をも高利から解放する{またそれによって同時に国家機構を自分たちに従属させる}ことに関心をもっていた」という特記のこと——青山)されており、公信用が信用制度の成立過程で重要な意味をもっていたことが示唆されている。」と言い、④オランダの例については、「これらの事実と信用制度の創造とがどのようにかかわっていたのかについての(ママ)はまったく触れていない。」(「商業や製造工業といっしょに商業信用や貨幣取扱業が発展し」「利子生み資本は発展そのものによって産業資本や商業資本に従属させられていった」という「事実」を述べ、「利子生み資本」の発展の必要性和必然性を明らかにすることが「歴史的過程」の考察ではないのか、そしてマルクスはそれをしてはいないか——青山)と言います。そして、大谷氏は、「最後に、これらの全体を通じて言えるのは、この「6)」で——総じてどこでも——マルクスは、産業資本が信用制度の創造によって高利資本を自己に従属させる歴史的過程について、実質的にはほとんどなにも書かなかった、ということである。」と断じます。

大谷氏が「ここでわずかに述べられている歴史的過程」と言い、「歴史的過程について、実質的にはほとんどなにも書かなかった」と言う、『資本論』第三部「第36章」での「利子生み資本」の「資本主義以前」からの変容の軌跡は、マルクスが書きエンゲルスが編集し、そして、大谷氏がその一部を抜粋した『資本論』のなかの諸事実の積み重ねによって、「商業や製造工業といっしょに商業信用や貨幣取扱業が発展し」ことが裏付けられ、資本主義的生産様式の発展のなかで、「利子生み資本は発展そのものによって産業資本や商業資本に従属させられていった」ことが理解できます。そして、そのことは『資本論』を読めば誰にもわかります。

『資本論』で述べられていることが、「国家権力を利用した利子率の強力的な引き下げとは異なる」「歴史的過程」の意味がわからないという、大谷氏の言うとおりの観念論なのか、それとも、大谷氏の言っていることが観念論なのか、皆さんは是非、『資本論』を読んで確かめてみて下さい。

④なお、P429からP434を読むなかで、大谷氏の言う「利子生み資本は発展そのものによって産業資本や商業資本に従属させられていった」「歴史的過程」とは、「信用制度形成史」つまり銀行制度の成立史であることがわかった。そしてそれが「注目すべき筋道にかかわるものとして彼(マルクスのこと——青山)が拾い上げたきわめて限られたものでしかなかった」ので「総じてここでの記述も草稿性がきわめて高いものであることに十分留意すべきであろう。」(P434)と言うのです。

③のところ、大谷氏が、「それではマルクスは、いったい、国家権力を利用した利子率の強力的な引き下げとは異なる、どのような歴史的過程を、「産業資本に特有な形態」である信用制度の創造によって「産業資本が利子生み資本を自己に従属させる」と考えていたのだろうか。率直に言って、マルクス自身は、このことをはっきりと読み取ることができるような記述を、この「6)」でも、またそのほかのどこでも書いていない」(P427)と意味ありげにマルクスを責め立てた内容とは、「第36章 資本主義以前」で銀行制度の成立史についてもっとスペースを割いて説明しろということだったのです。それが無いから、「総じてここでの記述も草稿性がきわめて高いものであることに十分留意すべきであろう」と言うのです。

このようなマルクスに対する誹謗に後ろめたさを感じたのか、大谷氏は、マルクスが「5) 信用。架空資本」の冒頭で、「信用制度とそれが自分のためにつくりだす、信用貨幣などのような諸用具との分析は、われわれの計画の範囲外にある」と述べたことを述べ、「マルクスが依然として、「信用制度の分析はわれわれの計画の範囲外」と考えていたことがこの「6)」からもうかがわれるのである。」(P435)とあって、これまでの大谷氏の自らの主張を全否定するかのようことを言います。

なお、大谷氏は、銀行信用のことを「信用制度」と言い、社会一般の信用のことを「信用システム」と言っています。

⑤最後に、大谷氏のこの章の「解題」の評価すべき点と不十分な点について一言触れておきます。

大谷氏は、資本主義が成立するための諸条件は資本主義が継続するための条件となるのではないと言う点について詳しく述べています(P382-388 参照)が、これは大変よいことだと思います。その中で、「資本主義的生産そのものの歴史的生成」の考察を扱ったものとして『資本論』第1部「第24章 いわゆる本源的蓄積」について触れていますが、この箇所を読んでいるとき、次のような残念な、不破さんのエピソードが頭に思い浮かびました。

「大谷研究の到達点も踏まえながら、エンゲルスの編集の問題点を指摘」することを公言し、大谷氏の力を借りて、なんとかしてマルクスとエンゲルスを貶めようとする不破さんは、この本が出版されていない——2016年の夏の出版——ので大谷氏のこの部分を読ん

でいなかったからかどうか分かりませんが、『前衛』2015年5月号で、「本源的蓄積」の過程——新しい生産様式の成立する過程——と「社会主義から共産主義」への過程——新しい生産様式の完成する過程——とを混同して、マルクスに悪罵を浴びせています。その後、この誤りを訂正したということを目にしていますが、不破さんは、マルクスとエンゲルスを貶めるために大谷氏の力を借りるのではなく、自らの誤りを訂正するためにこそ大谷氏の力を借りるべきでしょう。

※上記の不破さんの「混同」に関する詳しい説明は、[ホームページ 4-20](#)「☆「社会変革の主体的条件を探究する」という看板で不破さんが「探究」したものは、唯物史観の否定だった」をご覧ください。

次に、不十分な点についてですが、この章の冒頭で「第三六章 資本主義以前」の概要をお示しいたしましたが、未来社会に関してのこの章の大事な点は、結合労働の生産様式の社会への槓杆としての信用制度の役割を明らかにしていることだけではありません。

この章の、省略してはならない大切な点は、「生産手段が資本に転化しなくなれば(このことのうちには私的土地所有の廃止も含まれている)、信用そのものにはもはやなんの意味もないのであって、これはサン・シモン主義者たちでさえも見抜いていたことである。他方、資本主義的生産様式が存続するかぎり、利子生み資本はその諸形態の一つとして存続するのであって、実際にこの生産様式も信用制度の基礎をなしているのである。」(同P783)と、利子生み資本の未来を展望し、新しい生産様式の社会を展望する科学的社会主義の理論の理論的核心に論及していることです。

なお、「第三六章 資本主義以前」の概要については [PDF ファイル](#) 「第三六章」の抜粋と要約等」を、是非、ご覧ください。

大谷禎之介氏の「マルクスの利子生み資本論」全4冊の拝読と検証を終えて

私は、『資本論』とマルクスの草稿との間に齟齬があるかのように大谷氏が見ている点の解明に重点を置いて「マルクスの利子生み資本論」全4冊を拝読・検証してきました。その結果、もしかしたら、私が全面的に大谷氏の「マルクスの利子生み資本論」全4冊に否定的な見方をしているのではないかと思われた方もいるかもしれません。

私はこれまで、大谷氏の『資本論』に対する基本的な評価——ホームページの「大谷氏の『資本論』にたいする評価と『資本論』の葬り方」(PDF ファイルの P24 参照)——については適正なものだと認めた上で、「マルクスの構想を覆い隠すという罪つくりな仕事」などという根拠の無い主張には丁寧に応えてまいりました。

そして、大谷氏の、次のような、科学的社会主義の思想の誠実な探求者らしい態度には万雷の拍手を送る者です。

大谷氏は「利潤率の傾向的低下の法則」について、「マルクスはここで、利潤率の傾向的低下の法則を明らかにしているが、さらに進んで、『資本主義的生産が進行していくなかで』、すなわち資本の蓄積が進んでいくなかで、この法則がどのように作用し、資本をどのように運動させることになるのか、ということ考察する。そしてこのなかで、資本の諸矛盾の累積が、ある時点でこれらの矛盾を爆発させて、恐慌をもたらすことを明らかにしたのである。」(③の P259)と言い、「なお、念のために述べておくと、マルクスは第3部第1稿第3章を書いたのち、第2部第1稿を書き、その後ふたたび第1稿の執筆に戻

ったが、第1稿第5章を書きつつあった時点で、第1稿第3章で明らかにしていた一般的利潤率の傾向的低下の法則そのものについての論証を依然として正しいものと考えていたこと、言い換えれば、そこでの論証を不十分なものだったと反省して取り消すべきだと考えてはいなかったことは、第5章のなかの次の四つの記述を見れば明らかである。これはエンゲルス版第15章部分についても妥当することであろう。」(③の P275)と述べて、不破さんとは様々な関係があったでしょうが、それに惑わされることなく、不破さんの「利潤率の傾向的低下の法則」の評価とは正反対の評価を堂々に行ない、不破さんの言う、「第三篇」の最初の「第一三章」は「マルクスの最大の経済学的発見を記録した輝かしい章」、最後の「第一五章」はここで「展開した理論の主要部分を以後の草稿で取り消した章」、中間の「第一四章」は「第一五章の準備のため」の章で「不要になった章」だという妄言をキッパリと否定し、不破さんの作った「恐慌の運動論」にもとづく資本主義発展論をきっぱりと退けています。

このような毅然とした態度とともに、いや、それ以上に、この検証作業の最後に、大谷氏の「マルクスの利子生み資本論」全4冊の刊行の労に対して心から感謝したいと思うのは、この著作がマルクス通を自認するペテン師を撃退するうえで庶民の強力な武器を与えてくれた点です。

机の上にマルクス・エンゲルス・レーニンの著作らしきものを並べて、最先端の研究者のような顔をしてマルクス・エンゲルス・レーニンの著作を歪曲してマルクス・エンゲルス・レーニンの思想を捏造し、科学的社会主義の思想を台無しにして、日本の革命運動に致命的なダメージを与え続けようと画策している人に対して、大谷氏の『資本論』第3巻「第5篇 利子と企業者利得とへの利潤の分裂 利子生み資本」とマルクスの草稿との綿密な比較は私のような語学力のない者にとって強力な「真実の武器」を与えてくれるものとなりました。

その大谷禎之介氏も今はもういません。

大谷先生の多大な功績に感謝し、ご冥福をお祈り申し上げます。